

ディスカッション記録

河合 それでは皆さまお待たせしました。これからディスカッションの時間に入りたいと思います。この時間から発表された先生以外に登壇者として3人の先生方にご参加いただきます。金沢大学教授の足立拓朗先生、金沢大学准教授の菅原裕文先生、私と同じ金沢大学新学術創成研究機構助教谷川竜一先生です。

まずはこの3人の先生方から講評と、発表者への質問をお願いしたいと思います。それではまず足立先生からお願いします。

足立 金沢大学の足立です。金沢に来てから6年ほど経ちました。その前に博物館に勤務しておりましたので、お話しをさせていただくということになりました。

今日はいろいろと発表していただきまして、学芸員時代を思い出しながら懐かしく聞いていました。フセイン先生にアレクサンドリアの話をしていただきました。私はアレクサンドリアに行ったことがあるのですが、その頃はまだフセイン先生が後発表された博物館はありませんでした。その後、日本人も協力させていただいて完成したということで、日本人として大変光栄なことだと感じました。

中村誠一先生には博物館のいろいろな活動の話をしていただきまして、ちょうど横に座っていたのがリーディングプログラム（註；文化資源マネージャー養成プログラム）の第一期生の方で、こんなに立派な活動を伝えていて、もう何年もたっているにもかかわらず、この博物館活動に関して、ここまでまとまった話しを聞くのは初めてのような気がして、非常に立派な活動をされていて印象的でした。特に海外インターンシッププログラムによる学生たちの活動と、デジタルミュージアムとしての展示・教育活動、これを両立しているというところが素晴らしいなというふうに思いました。

その次の秦先生のご発表で、博物館でのご活動を初めて詳しくお聞きしました。やはり博物館での研究活動は大変であることが分かりました。

吉田先生には古墳の話をしていただきました。実は昨日、中能登町で雨の宮古墳群の保存のための会議がありました。今日、関係者の方にお聞きしたら、この会に100名以上参加者があったということです。石川県の方々の文化財に対する熱意を新たに感じました。私どもの研究室でやっている古墳の測量でも、地域の方の保存活動に金沢大学が協力させていただくという感じで行っております。古墳という文化財が地域の生活に生きているというのが、石川県の印象です。吉田先生には石川県外の事例をご紹介いただき、国内の文化財の様々な利活用が把握できました。

雪の中、羽咋市の中野さんに来ていただきました。11月の寺家遺跡のシンポジウムも素晴らしい内容でした。これから寺家遺跡がどのように史跡として整備されていくのか、非常に楽しみです。

菅原 今日は非常に刺激的なシンポジウムで各発表とも興味深く拝聴しました。私はそもそもメインのフィールドはトルコの Cappadocia、ビザンティン期の岩窟聖堂について研究してきましたので、金沢大に来る前後くらいからその保存活動であるとか、博物館と関わりが生じてきたということで、この登壇者の中ではおそらく博物館との関係が一番浅かった人間なのです。そうした私が今回いろいろな刺激を受けました。

まずそもそもフセイン先生の発表で、ご講演に関してなのですからけれども、そもそも私は古代

ギリシアの研究をやっていたものですから、アレクサンドリアは憧れの土地でありました。アレクサンドリアの図書館とか、そういったことも学生時代に勉強していたもので、水中博物館は、私がぜひ生きているうちに実現していただきたい。そして「ご招待」されたいなというふうに思っています。

それから私は今カッパドキアで、デジタルミュージアムの構想を立ち上げつつあるところなのですが、そもそもこうしたヒントをいただいたのは、そもそもが金沢へ来てから中村先生のご講演を聞いてからです。そしてコパンルイナスで博物館を一から立ち上げて、そのメインの展示が3Dシアターということでしたけれども、残った部屋をどう使うかということで、感銘を受けたのは、私は大学では博物館教育論を教えていまして、その教育の現場になっている、そしてその博物館で実習を行った学生が、今度は博物館からそのコパンルイナスの遺跡の価値を発信していくという、まさに発信地としての博物館というふうに育っていくのではないかという感想を覚えました。

それから秦先生のご発表ですが、こちら私も博物館教育論の面から見まして、展示の方法がとても素晴らしいということですね。あるものを修復しないで、修復したものでどこが本物でどこが修復箇所かというのをちゃんと示す。

さらにあれだけの規模で環境展示、動物園などではありますけれども、環境展示までやっていらっしゃる。それにもものすごく感銘を受けたのと、もう一つは学芸員イコール研究員であると。その研究の最先端にあるものが特別展示として公表される、公開される。こういうシステムが素晴らしいなというふうに思いました。

吉田先生と中野先生の発表はある意味リンクしていたと思うのです。吉田先生の古墳がどのようにまもられて、つたえられて、まつられているかという三つのパターンをご提示してくださいました。

私は、今カッパドキアで活動していますけれども、一番心に響いたのは遺跡が死ぬというのは人々に忘却されることであるという、長く生きる遺跡とは何かということなのです。やはり1923年のローザンヌ条約以来、カッパドキアからギリシア系の住民が引き上げてしまった。そしてカッパドキアの岩窟遺跡というのは人々の記憶からだんだん消えていっているという、割と今日の最後の一言がズシンと響くような言葉で、私もこれはどうやったら遺跡を生かしていけるのかということを考えさせられました。

谷川 私は新学術創成研究機構で、河合さんと一緒に文化遺産国際協力ネットワークユニットというユニットを担当しています。特に近現代のアジアの建築の歴史を専門としています。博物館に関する研究も行ってきましたが、世界中の博物館の取り組みを、様々な角度からまとめて拝聴できる機会というのは、大変貴重でありがたいものでした。

さて、今日のシンポジウムは、博物館から文化遺産の価値を発信するという内容でしたが、実はこのシンポジウムに先行する形で去年も本ユニットが主催となって1月にシンポジウムを行いました。その時のテーマは「世界遺産とともに生きる」というもので、世界遺産の価値を地域の事情側から検討したものでした。文化遺産の価値を発信するという意味でも、また地域——今日の言葉ではフィールドという方がふさわしいかもしれませんが——における文化遺産の意味を重視するという意味でも、今日のシンポジウムは昨年と対をなすような、あるいはその発展形のようなイベントであったと感じています。

それぞれの方へのコメントは足立先生、菅原先生がしてくださったので、私からは一つだけ全体に関する感想を述べさせていただきます。例えばアレクサンドリアという街の名前や、そのまちの博物館ということを目にすれば、多くの人はその博物館は遙か昔の人類のあけぼのを記録した歴史博物館という風に感じると思います。しかしバシルさんの今日のご発表は、そうし

た私の大ざっぱな印象を突き崩してくれるすばらしい内容でした。例えば「博物館を建設する上で、そのサイトがどのような場所だったのかということ、きちんと記録する必要がある」というお話がありました。その上で紹介されていたアレクサンドリアとナポレオンの関係、あるいはネルソンとの関係などは、人類のあけぼのを示すというものよりは、もっと近代の、もっと政治や経済という近い時代の人々の手垢にまみれたアレクサンドリアの歴史です。そうした歴史も大切であるとバシルさんはおっしゃっています。つまりアレクサンドリアの博物館は、単に古代だけではなくて現代に至るような近代、現代の歴史も含めて、町そのものとして記録して見せていこうとされているわけです。これは、先に述べた文化遺産の価値（展示物の価値）とフィールドの結びつき（地域とのつながり）を重ね合わせていく取り組みとして、大変意義深く感じました。人類の博物館でありながらも一種の大きな地域のミュージアムであり、同時に神々の時代の博物館ではなくて人間の手垢がついた博物館——だからこそ私たちは博物館から価値と省察を導き出せる——のではないかと思った次第です。

そのように見ていくと、他の発表者のみなさまも、その博物館や収蔵品が、それらが建つ場所や発見された地域とどのように関係を紡いでいくかということをもっと強く意識されているように感じました。

例えばROM（カナダ、ロイヤル・オンタリオ博物館）もそうで、カナダという場所にある意味や文脈を強く持つ博物館であると感じました。つまり、先住民や移民たちを、どのように国として包摂していくのか、ということが博物館の取り組みの背景にしっかりとある。多文化主義の尊重をはっきりと展示空間を貫くコンセプトとして維持しているわけです。

これらを踏まえれば、博物館を建ててその地域の文化や風俗、歴史をつたえたり、まもったり、あるいは遺物を祀ったりしていくような中で、私たちはどのようなまちや社会を目指すのか、ということがますます重要になっているのではないのでしょうか。私の専門が建築であったり、あるいは町づくりであったりするからこうしたことが気に掛かるのかもしれませんが。博物館を通して文化遺産の価値を発信するということが、畢竟将来この地域がどのような場所になってほしいのかというビジョンと密接に関わると思うのです。

翻ってそうしたビジョンの内容について私たちはどの程度意識を持っているのでしょうか。博物館の面白さや素晴らしさというのは、そうしたビジョンの面白さや素晴らしさと言い換えられるならば、普遍的な人間の価値を訴えながらも、同時に様々な地域や場所に即したビジョンがあってもいい。具体的に言えば、アレクサンドリアが示すビジョンと、羽咋の博物館的取り組みが示すビジョンは、どのように違うのか。そこには博物館同士が分担し合うビジョンのレベルの相違があってもいいようにも思います。私たちは人類の一員であり、地域を構成する生活者の一人でもある。そこをより意識していくことが、今後の博物館を通じた文化遺産の価値の発信において、重要になっていくのではないのでしょうか。

河合 どうもありがとうございました。

それではまず最初に会場から今日の発表に関していろいろご質問があるかと思いますが、遠慮なく挙手していただければと思います。いかがでしょうか。複数の先生に質問していただいてもいいですし、それぞれ投げかけていろいろご質問していただければ幸いです。よろしくお祈りします。

質問者A デジタルミュージアムの話がいくつか出ていたと思うのですが、その場合のデジタルデータというのは、基本的に誰でも利用出来るようなものになるのでしょうか。パブリックドメインとかそういうふうになって、誰でも利用出来るようなものになるのでしょうか。

河合 まずは中村先生からお願いします。

中村 コパンのデータの場合は、そういうパブリックに公開するという事はまずされていません。

これは凸版印刷が作っているのですけれども著作権に厳しい会社です。また、コパンの場合、ちょっと特殊なところがあります。最初2003年に作った時に、総務省配下の情報通信機構というところが、国のお金を入れて作ったものが第一版としてあって、今回の第二版に関してはホンジュラス政府の資金が入っているのですが、完全に全部バージョンを変えたわけではなくて、一部、昔のものをそのまま使っている箇所があるので、いわゆる著作権的には複数のところに帰属するような形になっています。それでまだホンジュラス側が完全に著作権を所有していません。現在、第三版を作ろうと準備しているのですけれども、そこではもう完全に全てをホンジュラスの政府機関が権利を所有出来るような形で作っていますので、パブリックの公開は、将来的な課題になると思います。

秦 デジタルと言えば、ROMはデジタル遺物ウェブサイトで、全部ではないですが、重要な収蔵品の一部を公開しています。何も制限はなく、普通にサイトにアクセスすれば見ることができます。なかには3Dのものもあります。著作権についてきちんとしていていると思っています。

河合 よろしいでしょうか。他にいかがでしょうか。どうぞ。

質問者B ありがとうございます。バシール博士にお伺いしたいです。二つほどあるのですけれども、まずエジプトはアレクサンドリアとか、古代のエジプトの時代から長い歴史があると思いますが、現代の人々は古代エジプト文明というのを自分たちの直接の祖先みたいな感じで繋がりを感しているのか、どういった意識を持っているのかといったことをおたずねしたいです。加えてご発表では、例えば小学校の教育活動で遺跡に来る、博物館に来るという活動がされていたのですけれども、そういった教育活動みたいな、展示以外の発信というのはされているのでしょうか。

フセイン（河合訳） 多くのエジプト人は古代エジプトを非常に尊敬しています。ただレイスラーム教のイスラーム主義者というか、かなり過激な人たちは古代エジプト時代というのは無知の時代というふうに考えているため、ようするにイスラームから彼らの歴史が始まるというようなことなので、古代のものは破壊してしまえばいいとか、無視してしまえばいいというような考え方を持っていたりもします。でもほとんどの人は非常に敬意を表して、自分たちの結びつきというものを考えていますね。

他の人は古代の遺物を売ってエジプトが金持ちになればいいということを考えています。こういったことで盗掘などが行われています。

子どもの教育活動というのがいろいろあって、カイロ博物館、それから前のムバラク大統領の夫人のスーザン・ムバラクが建てた博物館、これは今子供ミュージアムと言っています。それから彼の働いているアレクサンドリア図書館の考古学博物館、そこで例えば歴史の偉大な人物アレクサンドロス大王のことについてレポートしたりとか、それから絵を描かせたり、それから演劇をやったりとか、それで子どもたちに教育している。ソクラテスの演劇をやったりとか、そういったいろいろな活動を1年中やっています。

河合 他にいかがでしょうか。素朴な質問でもかまいません。

質問者C 新学術創成研究機構で河合先生と同じコアで共同研究をさせていただこうかなと思って今、卒検の学生に縄文土器を3Dのほうで作らせています。先ほどデジタルの話がありましたけれども、3Dのデジタルモデルとなると、けっこういろいろな研究者、他の研究者——我々は工学なのですから——工学の研究者とかそういったところがすぐ入りやすくて、何かちょっと新しい見方とか、新しい研究とか出来るような気がするのですね。そういったときに、今そういう3Dのデジタルのデータの扱いというのはどのようになっているのでしょうか。

私たちが例えばそれをでは研究するから使わせてくださいといったら、使わせてもらえるようなものなのか、それともやはり著作権があってなかなか難しいというようなことがあるのか、

何かその辺のことをもしご存知だったら教えていただきたい。

河合 先生方がいかがですか。3Dプリンタでプリントした風の神様のヒスイ像や王の石碑のレプリカが、先ほど中村先生のプレゼンで出てきました。ああいったものを作る上で、何か問題になることはありませんか。

中村 私がやっているものは、現地の研究所がほとんど許可の付与権を握っています。それで3Dプリンタで作ったものはコパンのデジタル博物館に入れるので問題ないのですけれども、ある先生がご研究に活用されたいというもので、金沢大学がお金を出すから作ってもいいのかという点は、許可制になります。研究に使うということであれば、許可取得は問題ないと思います。

河合 ちなみに、3Dプリンタではないのですけれども、例えば中国でスフィンクスのほぼ実物大のものを作ったのですが、それをエジプト政府が問題にして、我々の偉大な文化遺産のコピーを作ることはけしからんということでした。ほとんど同じ大きさのスフィンクスを作ってしまうと、それは結局壊される羽目になったということがあります。

ですから国によっては、そういった政治的な問題になるようなこともあつたりしますので、おそらく先生がやられるようなものはスフィンクスのような問題はないと思いますけれども、参考までにこういった情報を提供させていただきました。

質問者C ありがとうございます。

河合 他にいかがでしょうか。

質問者D 日本の博物館ですと写真撮影が禁止されているところがけっこう今でもありまして、その辺海外の博物館、美術館ではけっこう自由に撮影出来るようなところが多いのかなと思うのですけれども、その辺についていろいろお聞かせいただければなと思います。

フセイン（河合） ただでは撮れません。フォトチケットというのがあって、それがあれば撮影出来ます。ただしやはり彼らの重要な文化遺産ですので気をつけた方がよいでしょう。

河合 あと私が追加しますと、場所によってはフラッシュはたいてはいけないというのがありますよね。ですからノンフラッシュで周りに注意して、やはり展示室などですとショーケースとか狭いところにあつたりするので、記念撮影したりすると器物損壊などになりかねないので、その辺は注意するということがあります。

ROMのほうはどうですか。

秦 ROMの場合は平日の常設展示の撮影は可能です。フラッシュは使えませんが、自由に撮影は出来ます。ちなみに中国の博物館もフラッシュなしで撮影出来ますが、特別展示の場合はやはり撮影を禁止しています。特別展示場合の遺物は多数の博物館から調達してきているので、著作権の問題もあって撮影が難しいのです。ROMも同じように、特別展示の場合は展示品の撮影は禁止されます。

河合 それはフリーですか。チケットはいらないのですか。

秦 カナダのROMにはチケットが必要ですが、中国では政府運営の博物館はすべてフリーです。チケットはいいません。

河合 他の国はどうでしょうか。

中村 ホンジュラスの場合は基本的には撮れますが、持ち込み機材によって本当に専門家だけが使うような機材の場合は、お金を取られたりします。それからフラッシュは基本的には禁止です。

吉田 日本の博物館・美術館は撮影禁止になっているところが多いですね。最近は撮影可能だが、フラッシュ撮影のみ禁止という例も多いです。私が調査でたまに行くベトナムの博物館は、いくらかお金を払えば撮影できる館が多いです。先ほど話に出ていたフォトチケットというものです。しかも外国人観光客向けのフォトチケットの価格が現地の人向けよりも高額に設定されています。それはやはり発展途上国ならではの事情、観光による収入を経済力が高い観光客か

ら少しでも得ようということだと思います。今は一眼レフのカメラを持ち込まなくても、スマートフォンについているカメラでもけっこういい写真は撮れるので、撮影のハードルは下がってきています。また、博物館側が作成した3Dデータなどをウェブサイト上でも公開し、クリエイティブ・コモンズ・ライセンスのうち、非営利利用であれば再利用可のマークをつけるなど、いくつか条件をつけながらも、利用のハードルを下げている例もあります。個人的には、博物館が来館者に対して撮影を禁止するというのは、展示している実物のモノの魅力を信じられていないか、あるいはそれを伝える展示の作りに自信がないのかな、とも思います。

中野 羽咋の歴史民俗資料館では、基本的にスナップ撮影の範囲でOKにしています。企画展などで展示資料に個人所蔵のものがある場合は、撮影NGにする場合もあります。しかし、撮影禁止の制限を設けても、いまほど話のあったように「撮影のハードルが下がってきている」という傾向はもう止められないと感じていて、小さな資料館レベルでは目も行き届きませんし、撮影する人はどうしても撮影してしまう。ですから、むしろFacebook、Twitter、InstagramなどのSNSで情報発信してもらうほうが、情報露出の面で効果的なのではないかと思っています。基本的には、展示資料は文化財であり、羽咋市民、もっといえば国民の共有財産なのであって、公開活用に努めるのが前提です。博物館の展示行為の延長としてスナップ写真程度の範囲で持ち帰ってもらうことも現実的に考えなくてはいけなかなと感じています。

河合 菅原先生どうぞ。

菅原 カップドキアと違うのですけれども、私は去年にベルギー研修の学生引率をしました。それは途中で立ち寄ったアムステルダムだったのですけれども、アムステルダムはゴッホミュージアムとアンネの家はやはり撮影は禁止だということなのですが、アムステルダム国立博物館は撮影、フラッシュなしでいくらかでもOKと。Facebookに上げようが、Twitterに上げようが、それも逆に宣伝活動と捉えている。ゴッホミュージアムというのはそういう頑ななところが今そっちに、つまり撮影許可するほうになびいているということを伺いました。

河合 よろしいですか。それでは最後に先生方から発表に関して何かご質問とかありましたらお願いしたいのですがいかがでしょうか。

足立 それぞれの博物館でボランティア参加というのはどの程度あって、どういうふうに進めているかというのをちょっとお聞きしたいのですが。

フセイン（河合訳）（バシールさんのお勤めになっている）博物館では、アレクサンドリア大学の学生ですね、歴史学部、考古学部、観光学部の学生の中から優秀な学生を選抜して例えばフロントデスクだとか、ガイドの仕事を3カ月やらせています。そういったことをやることによって彼らが仕事を探す時に非常に有利になる。経歴になりますし、あるいはものすごく優秀な人がいれば彼を博物館で雇うというようなことをやっています。

中村 中米の場合は、メキシコでは当然やっていますね。盛んにやっています、エルサルバドルやグアテマラでは、国立博物館ではやっていますが、その他の博物館ではあまり聞かない。ホンジュラスはほとんど博物館がないのです。ですからホンジュラスの場合、博物館の設立も含めてメキシコの先進的な事例を目標にしていこうというふうにはしているはずですよ。

秦 実はボランティアの活躍はROMの一つの大きな特徴なのです。ROMのボランティア制度はROMの成立とともにできたもので、博物館運営に欠かせない部分としてとても大事にしています。ROMではボランティア部門を設置しており、登録しているボランティアの人数は常に600人を保持しています。ボランティアの募集にあたっては毎年決まった期間に試験があって、試験に受かった人だけがボランティアの仕事が出来るというシステムになっています。

なぜこうしたシステムを採用しているかということ、例えば若い人が厳しい試験を経てROMのボランティアに参加した際、その経験が将来その人の就職活動や仕事の広がりにも有効なもの

として受け入れられていることが一つの理由だと思います。ROMにおけるボランティア経験は若い人や時間がある人たち、社会貢献したい人たちにとってとても魅力がある仕事です。ROMの方もこうしたボランティア活動に参加する人たちに対して、とてもいい待遇政策を持っています。例えば、100以上の関係する博物館や美術館のチケット免除制度が、ROMのIDを持つボランティアの方には適用されますし、ROM図書館で資料を自由に使えます。さらにROMの特別展示や常設展示には毎年8枚のフリーチケットをボランティア方に配っているので、家族や友達もROMの展示を楽しむことができます。

吉田 私が取り上げた青塚古墳公園の管理にも多くのボランティアが参加しています。墳丘や古墳の清掃活動、博物館の受付なども担当しているそうです。さらに犬山市の近隣の市町村の文化財担当者、今日お話いただいた中野さんのような立場の人もサポートメンバーとしてNPOが主催する講座の講師を担当するなどして、様々な形で関わっています。

もう一つ付け加えたいのは、今日、私は古墳の形をしたピンバッジをつけていて「古墳大使」状態ですが、このピンバッジは青塚古墳に隣接するミュージアムで販売している、地元の人々が手作りしたものです。つまり私は「青塚古墳大使」でもある訳です。

中野 羽咋の資料館では、「れきみんボランティア」という組織があります。毎年、吉崎・次場遺跡で「弥生まつり」という弥生時代の体験イベントをやっていて、その手伝いをしていただく程度です。「組織」というより「仲間」と呼ぶ方がよいかもしれません。「ボランティア」という位置づけですが、どんな形でもよいので博物館活動に関わってもらえればOKと捉えています。史跡の管理や運営まで行うNPO組織は本当にうらやましい事例ですけれども、むしろ、うちの資料館に関わって「ファンになってもらう」という意識を大切にしています。博物館や文化財に興味があって、何かしらの形で応援したい、関わってみたいという気持ちの入り口になればと思っています。

資料館の事業として冬季に古文書講座を開催しているのですが、その講座の受講生たちから「もっと定期的に読む会をしたい」という希望があり、「古文書を楽しむ会」というサークルが生まれました。その会のテキストには収蔵資料の古文書を使用していて、結果的にその解読作業に結び付いています。古文書という博物館資料に対する「ファン」になった方々が、実際には博物館資料の調査研究や資料整理といった博物館機能の部分にも関わってもらうことができます。

また、私は出前講座を意識的に出るようにしていて、市内の公民館などに限らず、呼んでもらえれば、どこにでも行くのですけれども、「羽咋の歴民の中野の話なら、また聞こうか」と言ってもらえるように、学芸員が入り口になって博物館のことを身近に感じてもらえるようになれば有り難いことと思っています。それが「博物館は昔のものばかりが閉じ込められているところで、何か入りづらい」というイメージのギャップを埋めることに繋がって、その延長でいつか組織的なボランティアが充実したらいいなと思っています。

河合 どうもありがとうございました。他にいかがですか。発表された先生も他の発表者の先生にご質問とかあれば、いかがでしょうか。

吉田 博物館の学芸員の方に話を聞くと、小学校高学年くらいが博物館の行う社会教育活動の対象としてはゴールデンエイジ、つまり積極的に参加してくれる年齢層という見方が多いです。その年齢層の子供達は博物館によく来てくれる。ところで、その後はどうですか。つまり、中学校に入ったならその子供たちはどうなるのか。それが未来に関わることだと思いますが。

中野 そこは私たちも課題と考えています。うちの資料館では、「昔の暮らしの学習」というカリキュラムで市内の小学校3年生たちが民具展示室の学習に来ます。そして、6年生になると社会科で歴史の学習が始まり、歴史展示室に来てくれるのですが、そこから先の中学生になると、

これがなかなか難しい。

中学生になると、小学生のころとは違って、部活もあるし、テストもあるし、だんだん生意気になっていくし、全然来なくなってしまう。小学校6年生の時は、放課後に仲間と連れ立って遊びに来て、喜んで勾玉づくりをしていた彼らが、たまに見かけて声をかけると気恥ずかしい様子で挨拶してくれたりします。私は中学校にも出前講座があって、中学校1年生の総合学習の時間で「羽咋の地域調べ」について話しをするのですけれども、一年前には一緒に勾玉づくりや火起こし体験をした見覚えのある彼らが目の前に大勢座っているわけです。でも、彼らのほうは「あ、あの時の学芸員の中野だ」みたいな感じです。なぜ中学校に入るとそうなるか分からないのですけれども。やはり思春期を迎える変わり目なんですかね。成長の段階として当然のリアクションなんでしょうけど。

高校生になると、さらに博物館との接点が少なくなります。高校生も部活や受験勉強とか忙しいと思いますが、高校生こそ地域を知ってほしいと思っています。高校生は卒業すると、大学進学や仕事で羽咋を離れていきます。彼らにこそ、羽咋を語れるようになってほしい。「あなたの故郷の羽咋って、どんなところ？」と聞かれた時に、こんな自然があって、歴史があって、そんな故郷で生まれ育ったと答えられるようになってほしいと思っています。中・高生へのフォローは、私たちの目下の課題です。

吉田 私は高校の教員免許を持っていますが、そのために必要な教育実習は中学校で行い、中学校一年生を担当しました。中学校一年生はまだ小学生の延長みたいな感じで、授業もとても進めやすいです。質問をすれば自分が回答したい、と次々に手が上がります。ところが中学校二年生になると急に生徒の目つきが変わって、自発的に手を挙げることもなくなってしまうのです。その間に彼ら・彼女らに一体何があったのか、おそらく自分も同じ経緯を辿ったのだと思います。このように生徒たちが思春期に入ることが、彼ら・彼女らを博物館活動に巻き込むことを難しくしていますが、結果的に生徒を抱え込んでしまいがちな学校側の問題も大きいかなと思います。私は常々、中高以降はクラスもなくしてしまって、部活も外部の人にまかすという仕組みに移行した方がいいと思っています。学校の先生の「ブラック部活動」という言葉があるように、先生たちの過酷な労働実態も問題になっていますし。気が合わない他の生徒たちと教室という同じ空間に無理にいなくてもよくて、何かの部活に入らなくてもよくなった生徒のうち、何人かでも博物館に来てくれたらいいかな、ということです。ただそうすると、いまの多くの学校の先生が素晴らしいと思っていること、例えば集団行動をソツなくこなすこととか、部活で頑張ったという思い出作りなどをあきらめるといふことにもなりますが。

河合 ちょっと違うテーマになりましたね。

私から吉田先生に質問があります。大変面白いお話を聞かせていただきました。古墳の文化資源としての活用をNPOがやり始めたという話でしたけれども、古墳を管理する神社のほうはどのように考えているのでしょうか。あるいはNPOというのはどういうNPOなのか、ただNPOと出たので、どういう団体なのか説明が聞けなかったのですけれども。お願いします。

吉田 神社がどう考えているかは、あまりよく知りません。NPOは正式名称を「古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク」、通称を「ニワ里ねっと」と言います。愛知県犬山市周辺は「丹羽郡」という地名で、元々は難しい漢字で「瀬波」と書かれていたそうです。その「ニワ」の地域で、文化遺産を生かしたまちづくりを目的として設立されたNPOです。青塚古墳での活動の中には、そんな人たちが作り出した、いわば「物語」に駆動されているようなものもあります。ただそれらが、その土地の歴史的経緯と全く無関係ではないというところが重要なところだと思います。

あともう一つは、NPOの活動が今日のテーマのひとつである文化遺産の「正しい」知識を

伝えるということからは外れている部分があるものの、地域の活性化としては機能しているのが面白いところであり、重要だと思います。そういったことが目の前で行われている時に、例えば文化遺産に学術的な専門家として関わる人たちは、それらに対してどこまで協力するか、調整するかを考えなければいけないと思います。

河合 古墳の被葬者が眠っているということでしたが、すなわちまだ発掘調査は行われていないということとして理解してよろしいでしょうか。

吉田 主体部については行われていません。

河合 例えば物理探査等で古墳の主体部の状態をチェックするようなことはやってないのですか。

吉田 その地域の人たちがどういうふうを考えるかではないでしょうか。もしそういう案が持ち込まれた時に、本当に中がどうなっているか知りたいと思うのか、知ってしまうと、古墳が案外盗掘されているという残念な事実が分かってしまう可能性もありますよ、といったことも提示しながら進めた方がいいと思います。

河合 教育委員会の方から、そういったNPOの活動に関して何か抵抗みたいなものはないのですか。

吉田 教育委員会がNPOに管理を委託する、という格好になっています。ニワ里ねっとは受託契約という形態ですが、具体的には指定管理者制度というものも博物館に適用されることがありますと言います。企業やNPOを含む民間の組織が提案を行政に出して、それらを選定して管理者を指定する流れです。ある提案を採択して一旦管理を指定管理者に任せたら、あとは好きにやってくださいみたいな感じになっているらしいですね。もちろん受託契約も指定管理者制度も、計画どおりに行われているかのチェックは行政から入ると思いますが。

河合 吉田先生のご発表に関係して、中野先生の今日のご発表で、寺家遺跡は、氣多神社に関係する祭祀遺跡ということなのですけれども、現在の地域の人々の反応はどうなのでしょう。

中野 寺家遺跡は、古代の氣多神社の神まつりに関わる祭祀遺跡ですが、非常に厚い海岸砂丘の砂に埋もれているため、現在の私たちの生活からは完全に切り離された状態です。地形が大きく変わっているので、遺跡に立っても、古代の地形を観察することはできませんし、ここに古代の祭祀遺跡があったのかというインスピリットを感じることもできない状態です。ですから、地元の人たちが、その場所に対して今でも敬意を持っているかというところではありません。青塚古墳のように、地上に構築された遺跡は長期に渡って人々に認識されて、一定の敬意も払われてきたと思いますが、この寺家遺跡の場合は、一度、人々の意識から忘れられていて、現在の生活とは断絶があるわけです。

ですから、地元の皆さんに対しては、まずこの遺跡で発見されてわかったことや価値を知ってもらうよう整備して、「ここに寺家遺跡があるよ！」ということに興味を持ってもらうことが必要と思っています。史跡整備のなかで、「もう一度、古代祭祀遺跡があった場所として“聖地化”するか？」というところ、そのような整備は考えていません。遺跡はずっとそこにあったわけですが、古代に自然の力によって圧倒的な土量の砂丘の砂に埋没してしまい、現代の道路工事に伴う発掘調査で再び姿を現し、現在に至るという非常に長い時間軸を「物語」として知ってもらいたいと考えています。

河合 なかなかいろいろなケースがありますね。答えというのは別に一つあるわけではなくて、その地域その地域が持っている伝統とか、その人々の考え方というものが、けっきょくそういった文化遺産というのをどのように考えているのかというところに結びついていると思います。

開発や発掘調査があって、その地域の人々の長い過去の歴史というものが、先生がおっしゃったように人が関わっていないと忘れられてしまうというのは全くその通りです。バシールさんにも説明したのですが、エジプトも同じでそこに遺跡があったとしても人々が関わっていないと、例えば今のイスラーム教徒の墓地が遺跡の上に作られてしまって、記憶がなくな

ってしまうということがあります。海外で調査している人も現地の人々に、重要な価値のある遺跡が存在することを説明して何らかの形で関わっていただき、我々が色々な形でサポートしていくということは必要なのだなというのは強く感じました。

少し時間を超過しましたがけれども、我々にとっても非常に有意義なシンポジウムだったと思います。今日ご発表された先生方にもう一度拍手をお願いいたします。

それでは解散とさせていただきます。お疲れ様でした。

シンポジウムの記録



写真1 中村慎一新学術創成研究機構構長の挨拶



写真2 河合望准教授の趣旨説明



写真3 フェサイン・バシール博士の基調講演



写真4 中村誠一教授の発表



写真5 秦小麗教授の発表



写真6 吉田康幸准教授の発表



写真7 中野知幸氏の発表



写真8 ディスカッションの様子



写真9 足立拓朗教授のコメント



写真10 菅原裕文准教授のコメント



写真11 谷川竜一助教のコメント



写真12 コメントする吉田、中野両氏



写真13 ディスカッションの登壇者（右から谷川、菅原、足立、中野、吉田、秦、中村、バシール、河合）



写真14 ディスカッションに参加した登壇者

プログラム

- 13:00 開場
- 13:30~13:35 開会の辞
中村慎一 (金沢大学新学術創成研究機構長)
- 13:35~13:40 趣旨説明
河合 望 (金沢大学新学術創成研究機構准教授)
- 13:40~14:40 基調講演
「アレクサンドリア図書館付属考古学博物館：古代アレクサンドリアの栄光」
フセイン・バシール (エジプト、アレクサンドリア図書館付属考古学博物館館長)
- 14:40~16:05
- 発表 1: 「世界遺産のあるコミュニティと博物館
—ホンジュラス・コパルイナスの事例より—」
中村誠一 (金沢大学国際文化資源学研究中心
ター教授)
- 発表 2: 「伝統的な博物館コレクション研究、展
示とフィールド調査
—カナダのロイヤルオンタリオ博物館の考古
学研究と関連展示を事例として—」
秦小麗 (金沢大学国際文化資源学研究中心
特任准教授)
- 発表 3: 「古墳をまもる・つたえる・まつること
と博物館」
吉田泰幸 (金沢大学国際文化資源学研究中心
ター特任准教授)
- 発表 4: 「羽咋市の史跡の保存と活用
—国史跡寺家遺跡の整備に向けて—」
中野知幸 (石川県羽咋市教育委員会学芸員)
- 16:30~17:30 討論
パネリスト: フセイン・バシール、中村誠一、秦小麗、吉田
泰幸、中野知幸、足立拓朗 (金沢大学人文学類教授)、菅原
裕文 (金沢大学人文学類准教授)、谷川竜一 (金沢大学新学
術創成研究機構助教)
司会: 河合 望

Museum

as the center of the transmission of Cultural Heritage



公開シンポジウム
「文化遺産の発信地としての博物館」

2018/2/12 (月) 13:30~17:30

石川県政記念しいのき迎賓館 (金沢市)
3階セミナールーム B (無料)

問い合わせ先: 河合望 (金沢大学新学術創成研究機構)
nozomu.kawai@staff.kanazawa-u.ac.jp

国内外の考古学博物館、遺跡博物館に携わる専門
家を招き、文化遺産としての遺跡の価値を発信す
る博物館の現状や今後の可能性について考える。



金沢大学
KANAZAWA
UNIVERSITY

主催: 金沢大学新学術創成研究機構・文化遺産国際協力ネットワークユニット
共催: 金沢大学国際文化資源学研究中心、金沢大学資料館

編集後記——謝辞にかえて

『文化資源学研究』第21号は、2018年2月12日に開催した公開シンポジウム「文化遺産の発信地としての博物館—Museum as the center of the transmission of the Cultural Heritage—」をもとに、各発表者に論考の執筆を依頼しそれらをまとめたものである。また、シンポジウムのディスカッションも編集して、掲載した。

今回のシンポジウムでは国内外の考古学博物館、遺跡博物館に携わる専門家が参加し、文化遺産としての遺跡や遺物の価値を発信する博物館の現状や今後の可能性について有意義な議論ができた。発表者および参加者のおかげで本シンポジウムが大変充実したものとなったことを主催者一同、感謝とともに記しておきたい。

またシンポジウムには、金沢大学新学術創成研究機構の中村慎一機構長からご挨拶をいただき、金沢大学歴史言語文化学系の足立拓朗教授ならびに菅原裕文准教授からはシンポジウムのディスカッションにおいて有益なコメントを頂戴した。主催者・编者である金沢大学 新学術創成研究機構 文化遺産国際協力ネットワークワーキングユニット構成メンバー一同より深謝をお伝えしたい。また、本論文集の編集に際し、金沢大学人文学類フィールド文化学コース・考古学特別プログラムの岡部睦さんよりご協力いただいた。ここに記して感謝したい。

本報告は、金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センターの出版物であると同時に、前述した文化遺産国際協力ネットワークワーキングユニットの活動報告書という意味ももつ。同ユニットは4年目を迎え、研究内容をますます深化・発展させている。今後、さらに多様な媒体での発表やイベント企画などへ活動の幅を国内だけでなく国際的に広げていくことを計画している。これからも関係各位からのご支援を賜ることができれば幸いである。

2019年3月1日
金沢大学 新学術創成研究機構
文化遺産国際協力ネットワークワーキングユニット
河合 望・谷川竜一

編者プロフィール

河合 望

(金沢大学新学術創成研究機構・准教授、金沢大学資料館副館長)

1968年東京生まれ、埼玉県比企郡育ち。早稲田大学大学院文学研究科史学（考古学）専攻修士課程修了。米国ジョーンズ・ホプキンス大学大学院博士課程修了（Ph. D.）。UNESCOコンサルタント、早稲田大学高等研究所准教授、カイロ・アメリカン大学客員教授等を経て、2016年より現職。約30年にわたりエジプト現地での発掘調査や保存修復事業に従事。著書に『ツタンカーメン 少年王の謎』（集英社、2012年）、共著書に『エジプト王家の谷・西谷学術調査報告書〔I〕－アメンヘテプ3世王墓（KV22）を中心として－』（中央公論美術出版、2008年）など、共訳書に『一冊でわかる 古代エジプト』（岩波書店、2007年）がある。

谷川竜一

(金沢大学・新学術創成研究機構・助教)

大分県生まれ、奈良県育ち。東京大学大学院工学系研究科博士課程中退（工学博士（建築））、東京大学生産技術研究所・助教、京都大学地域研究統合情報センター・助教をへて2015年より現職。主な著作に、『灯台から考える海の近代』（京都大学出版会、2016年）、「3.75°の近代－旧朝鮮総督府庁舎からみる建築設計の歴史的可能性」（谷川竜一ほか編『衝突と変奏のジャスティス』青弓社、2016年、pp.114-137）ほか。

執筆者プロフィール（50音順）

フセイン・バシール

(エジプト、アレクサンドリア図書館附属考古学博物館館長)

1973年エジプト、カイロ市生まれ。カイロ大学考古学部卒業後、エジプト考古最高評議会の査察官としてギザやバハレイヤ・オアシスで発掘調査に従事。米国ジョーンズ・ホプキンス大学大学院にてエジプト学の博士号（Ph. D.）を取得。エジプト帰国後は、ギザ遺跡、大エジプト博物館保存修復センター等のダイレクターを経て、現職。

主な著作は、『*Image and Voice in Saite Egypt: Self-Presentations of Neshor Named Psamtikmenkhib and Payeftjauemawyneith: Volume 2* (Wilkinson Egyptology Series), Tucson, 2014.

秦 小麗

(金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター 客員研究員、中国 復旦大学文物与博物館学系/科技考古研究院 教授)

1962年中国山西省運城市生まれ。中国北京大学考古学系修士課程修了（歴史修士号取得）。日本京都大学大学院文学研究科博士課程修了（博士（文学）号取得）。中国陝西省考古学研究所助理研究員、カナダロイヤルオンタリオ博物館 researcher Associate、金沢大学国際文化資源学研究センター特任准教授を経て、2018年10月より現職。

主な著作は『黄河流域におけるトルコ石製品の生産と流通』（金沢大学国際文化資源学研究センター『文化資源学研究』第19号2018）；『中国初期国家形成の考古学研究—土器からのアプローチ』（六一書房 P288、2017）；『早商城市文明的形成と発展』（中国科学出版社 2016年）；『中国古代裝飾品研究—新石器時代～早期青銅時代』（陝西師範大学出版社 P320、2010年）などがある。

中野知幸

(羽咋市教育委員会／羽咋市歴史民俗資料館)

1978年石川県羽咋市生まれ。国学院大学文学部史学科卒業（考古学）、国学院大学大学院修士課程修了（博物館学）。国学院大学文学部助手（学芸員養成過程）、民間発掘調査会社を経て、2008年から現職。地域の学芸員として、埋蔵文化財を中心におきながら、他の文化財も含めた羽咋地域の歴史・文化の総合的把握に取り組む。主な業績に『寺家遺跡発掘調査報告書 総括編』（羽咋市教育委員会、2010）、『史跡寺家遺跡保存管理計画書』（羽咋市教育委員会、2014）、「郷土文化資料の概念」『人文系 博物館資料論』（雄山閣、2012）

中村誠一

(金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター・教授)

1958年山梨県甲府市生まれ。金沢大学法文学部史学科卒業（考古学）。埼玉大学大学院文化科学研究科修士課程修了。マヤ文明の遺跡の一つである世界遺産コパン遺跡を中心に数多くのマヤ考古学プロジェクトを指揮。2000年にはコパン遺跡で、アクロポリスの外では初めてとなる「王墓」を発見するという、考古学界では世界的な大発見を成し遂げる。古代アメリカ学会の前身である古代アメリカ研究会の設立発起人の一人。2006年ホンジュラス国大統領から文化功労章を授与される。2012年より現職。

著作は、『マヤ文明はなぜ滅んだのか』（Newton Press）、1999年、NHKブックス『マヤ文明を掘る』（日本放送出版協会）、2007年など多数。

吉田泰幸

(金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター・客員准教授、セインズベリー日本藝術研究所客員研究員、オーストラリア国立大学アジア太平洋学部客員研究員)

愛知県生まれ。名古屋大学大学院文学研究科人文学専攻博士課程後期修了。博士（歴史学）。

主な著作に『Japanese Archaeological Dialogues: 文化資源学セミナー「考古学と現代社会」2013-2016』（金沢大学国際文化資源学研究センター、2017年、John Ertlとの共編著）、「考古学における「ふくげん」のエスノグラフィー」（『民博通信』159号、2017年）、「Archaeological Practice and Social Movements: Ethnography of Jomon Archaeology and the Public」（*Journal of the International Center for Cultural Resource Studies, Kanazawa University* 2, 2016年、John Ertlとの共著）

金沢大学 文化資源学研究 第21号

発行日 2019年3月31日

発行 金沢大学人間社会研究域附属
国際文化資源学研究センター
〒920-1192 石川県金沢市角間町

編者 河合 望・谷川竜一

印刷 株式会社 栄光プリント
〒920-0806 金沢市神宮寺3-4-17